

こんな私でも救われた5



ジーザスコミュニティー国分寺牧師
桜井知主夫

私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。(詩篇五一・11～13)

これはダビデがバテ・シエバと不倫をし、彼女の夫ヘテ人ウリヤを計画的に殺した後に受けた厳しい懲らしめの中で書いたものです。彼は、聖霊が与えられていたにもかかわらず、性的不品行の罪を犯し、聖霊が取り去られるという危機に瀕しました。性的不品行は大きな罪であり、神は厳しく対処されることが分かります。

婚前交渉の罪のゆえに暗闇に叩き込まれる

私は、聖霊のバプテスマを受けたときは婚約中でしたが、その人と性的不品行の



罪を犯しました。さらに、その人との婚約が解消になってから、違う女性と婚約し、さらに性的不品行の罪を犯しました。それゆえ、神は私を厳しく懲らしめ、その婚約も解消されました。それだけではなく、その後二年もの間、聖霊の喜びは取り去られ、暗闇のどん底に叩き込まれたのです。

十三歳のときに教会を去った私は、婚前交渉が罪であるということをハッキリとは知りませんでした。高校生の頃から彼女がいた私は、性的な不品行を繰り返してい

たのです。

しかし、聖霊を受けてからの性的不品行の罪は、それ以前とは明らかに違うレベルのダメージを魂に与えました。「だまされてはいけません。(性的に) 不品行な者：みな、神の国を相続することができません。」(1コリント六・9-10)と書いてある通りです。神は、この領域の罪に対し厳しく対処されることを、このとき知ったのです。

鬱の症状が進み自殺未遂へ

私は自らの性的な罪のゆえに、二年間にわたり鬱になり暗闇を這いずり回っていました。神がせっかく私をカメラマンとして祝福してくださっていたのに、鬱がひどくなり徐々に仕事も減っていきました。

ある日、焼肉屋で打ち合わせをしていた時のことです。肉を飲み込んでも、のどの筋肉が口内へ戻ってしまうのです。つい

に体が食物を拒むところにまで追い込まれた瞬間でした。毎日、両肩が二トンほどの重りに圧迫されているようでした。それが取り除かれる気配もまったくなかったのです。

ある夏の午前三時頃、私は東京湾にいました。自殺したかったのですが、度胸がなく、ただ狂気が宿るのを車の中で待っていました。車ごと海の中に突進すれば死ねると考え、エンジンをふかしていました。



しかし、そこに訪れたのは狂気ではなく、神の静かな声でした。神は「わたしにもう一度チャンスを与えなさい」と、語りかけてくださったのです。

そのときは、「人間は、神に何かを与えられることができるか」と思いましたが、後年、聖書には「だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。」(ローマ十一・35)と書いてあるのを知りました。

再びテゼ共同体へ

私は自殺することを思いとどまり、帰宅しました。そして考えました。「どのようにして神にチャンスを与えればいいのか」。それさえも神に聞かなければなりませんでした。藁わらをもすがる思いでテゼのブラザー・トーマスに国際電話をかけ、自分の状況を打ち明けると、思いがけず「テゼに来なさい」と言われました。

私はしばらくして、フランスのテゼに

向かいました。しかし、テゼに着くと、「ブラザー・ロジエもブラザー・トーマスも、ローマに行っている」と言われました。テゼが主催していたカトリックとプロテスタント合同の若者の祈り会のために、彼らはローマに行っていたのです。テゼに残っていたブラザーに「あなたもローマに行きたいか？」と尋ねられたので「はい」と答えると、ローマ行きの切符を世話してくれました。



ローマでは、郊外のカトリックの修道会に泊まりながら、毎朝バスに乗って、ローマの中心部で行われていた祈り会に通いました。ローマの新聞には、「冷戦後初めて、共産圏ハンガリーから八〇〇人の若者がテゼ共同体の祈り会に参加するため、ローマに来た！」という見出しが一面を飾っていました。

ブラザー・ロジエを通して 示された神の愛

ローマ市内にある巨大な教会堂を歩いていると、ハンガリーの若者がブラザー・ロジエを囲んでいるところに出くわしました。その様子を見ると、なぜか腹の底から妬みと怒りが込み上げてきたのです。私は露骨にブラザー・ロジエを睨みつけました。「どうせ、お前は白人にしか興味がないんだろう。お前はニセもんなんだよ」と、苦い思いが吹き出してきたのです。

彼は三〇メートルほど先にいましたが、優しく、しかし戸惑った目で私を見つめているのが分かりました。そんな状況が三分ほど続き、そこにいた若者たちが騒ぎ始めました。何人かの若者が、「あなたは、どこから来たのか」と質問してきたので、「日本だ」と吐き捨てるように答えたとき、ブラザー・ロジエが若者たちの間から私の方に近づいてきました。

彼の手には、マザー・テレサの孤児院から養女として引き取ったインド人の女の子の手が握られていました。若者たちの背が高く、小さな女の子がいるとはまったく気がつきませんでした。

驚くことに、ブラザー・ロジエは苦い思いであふれている私の手を取りました。そして、インド人の女の子と私と三人で、巨大な教会堂を一〇〇メートルほど歩いて外に出ました。大勢の若者が、私たち三人を見つめていました。私は恥ずかしくて顔から火が吹き出しそうでした。なぜなら、

彼が私に歩み寄り、思いやりを示してくれ
たその瞬間、苦い思いにあふれていた自分
に気がついたからです。妬んで、恨んで、
怒って、憎んで、恐れていた私に、光が照
らされたのです。

教会堂から外に出たところで「これか
らどうするのか」と、ブラザー・ロジェが
私に聞きました。「テゼ共同体に行つて祈
ります」と答えるのが精一杯でした。それ
から三〇日間、昼夜かまわず咽^{むせ}び泣き、祈
りました。テゼでは、毎食後、一時間の礼
拝をします。礼拝に出たまま残り、朝昼晩
と祈りました。腹の底からうめき「助けて
ください」と懇願し、多くの場合は言葉
にもならず、ただ涙がテゼ共同体の会堂の
床を濡らしました。

聖霊の喜びが戻り、三つの 願いを神に叫び求める

祈り始めてから二〇日を過ぎた頃、不

思議なことが起こりました。それまでの二
年間、私の両肩を圧迫していた二トンにも
感じる重りが取り除かれていたのです。そ
して、感謝なことに聖霊による喜びが戻っ
てきたのです。テゼでの最終週には、私の
内側にある喜びに惹きつけられて、多くの
若者が近寄ってきました。

三〇日間の祈りの中で、三つのことを



キリストに願いました。「本物の教会、牧者、
兄弟姉妹を与えてください」と、そのよう
に祈って帰国しました。

神は、私を愚かな肉の思いから引き離
すために、懲らしめられました。懲らしめ
は、神の性質を身につけるためであると聖
書は言っています。神は聖い方なので、私
も聖くなる必要がありました。神は私を聖
くするために呼ばれたのに、聖霊を受けて
直ぐに私はつまずきました。神は、そんな
私を鬱の期間を通して懲らしめられたので
す。

「主はその愛する者を懲らしめ、受け入
れるすべての子に、むちを加えられるから
である。訓練と思つて耐え忍びなさい。神
はあなたがたを子として扱っておられるの
です。父が懲らしめることをしない子がい
るでしょうか。」（ヘブル十二・6-7）

日本に帰ると、生まれて初めて自発的
に「本物のキリスト教会」というものを探
し始めました。（次号に続く）